1997年10月1日　発行

長野市立

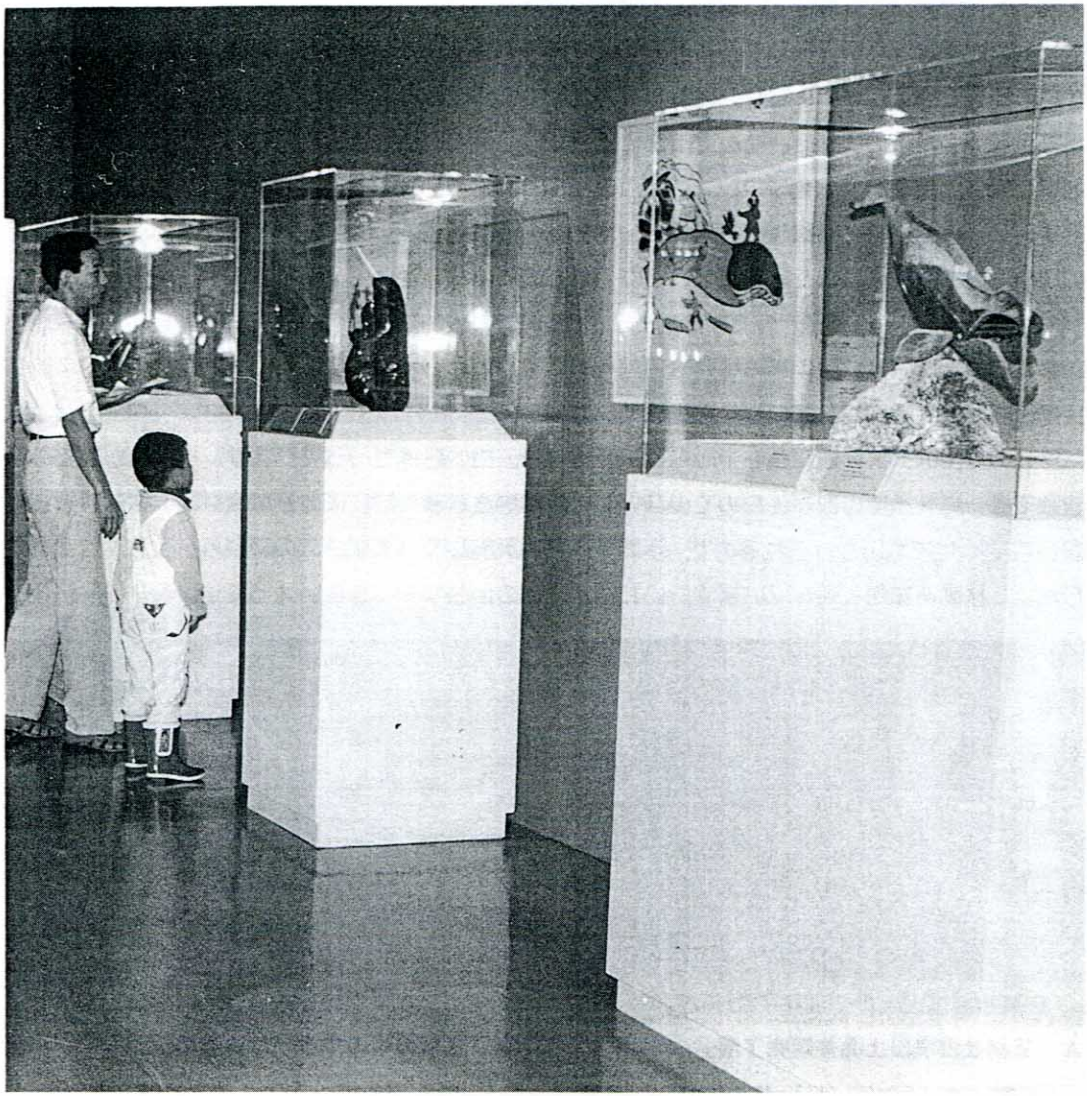
博物館だより　第40号

長野市小島田町1414 ☎026(284)9011

極北のイヌイットアート展

〈11月9日(日)まで〉

開　催　中



移動博物館って何!!

博物館の利用者像

当館は創設の目的として、「市民の文化創造の拠点とする」と地域文化の創造をかかげています。また来館者へのアンケートによると、利用者の60～70%は市内及び近隣の方々です。「川中島古戦場」という立地環境からすると観光客が多いと思われがちですが、利用実態は異なるようです。

このように、当館の目ざす博物館像は、「地域に根ざす博物館」であり、利用者像としての市民の姿を明確にとらえることができます。

移動博物館の発想

「地域に根ざす」ことをめざすとしても、地域による利用度に大きな違いがあります。当館は、長野市郊外の南部に位置しているため、北部や山間部の方々の利用が少ないという傾向がみられます。実際に聞き取り調査をしてみると、「博物館の存在は知っているが、まだ行ったことがない」という声を聞くことができます。従って、博物館の利用を受身的に待つことより、積極的に地域に出ていこうと発想しました。進んで市民に働きかける開かれた博物館を実践しようとしたのです。地域の中に入りこんで点をふやし、点と点を結んで文化のネットワークを広げていこうというものです。こうした移動博物館などを通じて、博物館の存在を強く印象づけることができ、博物館利用についての積極的な意欲を喚起することができるのではないかと考えています。

移動博物館の実践

移動の展示は、平成２年春の芋井公民館での「教科書今昔」展を皮切りに、館蔵資料の展示を公民館・郵便局・図書館などで毎年実施しています。

移動の教室は、天体観望会を中心に平成元年より、市内各地で行っています。市内中心部での観望会では、見える星の数がきわめて少ないことが実感されました。天体観望会は、天体望遠鏡を持参して、どこにでも出かけられるので、年間７～８回実施しています。この移動展示と移動教室を合わせて、移動博物館と呼んでいます。いわば博物館の出張サービスといえるでしょう。

▲「飯綱社古墳出土品修理完了展」

（1993年４月24日～25日・篠ノ井上石川公民館）

▲「生活の中のワラ―はきもの―」

（1992年１月14日～28日・長野中央郵便局）

移動博物館の展開

博物館は、非日常的な空間で、気軽に行けるところではないという意識が実情のようです。これは当然改善すべき点ですが、日常的空間の延長に移動博物館を置くことで、博物館を身近な存在として感じてもらえるのではないかと思っています。地域の意向を踏まえて、多様な企画を更に展開していきたいと考えています。

（文責　山口 明）

「市民参加の博物館活動より」▶

（1996年２月５日～16日
・市役所２階市民ギャラリー）

移動展を見に行こう!

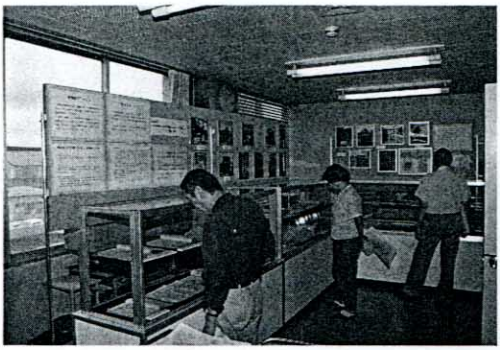
今度の移動展は
『恐竜足跡化石発掘調査速報展』です。
北安曇郡小谷村で行われた日本最古の足跡化石の発掘調査の成果を紹介します。
ぜひ足を運んでみてください。

場所と日程は下記の通りです。

◇11/1(土)～11/4(火)　小谷村公民館
◇11/6(木)～11/20(木)　長野市役所 ２階市民ギャラリー
◇11/22(土)～12/8(月)　長野市立図書館

天体観望会▶

（1992年７月30日・小田切グランド）



◀「地域探訪
～旧役場文書からみる人々の暮らし～」

（1997年９月８日～18日・若槻公民館）

地域探訪 『千曲川』その③ ～船渡場と肥え桶一件～

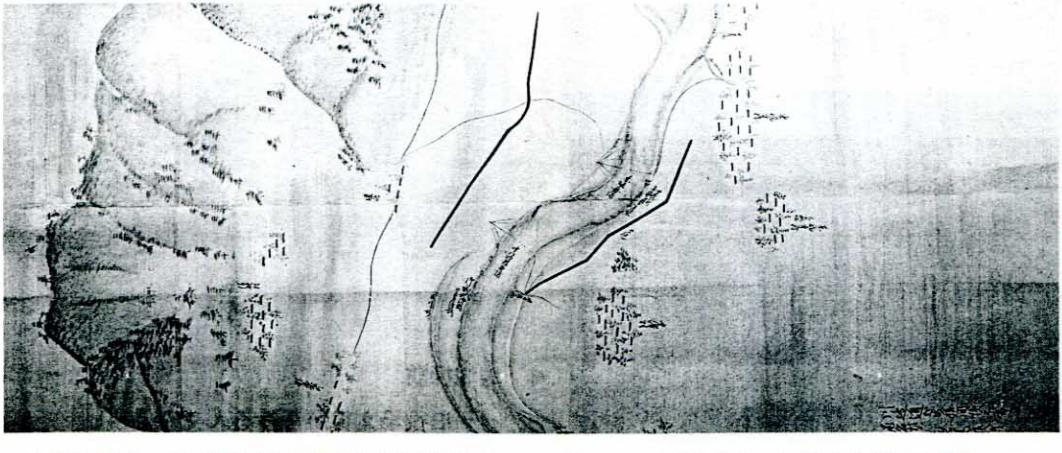
千曲川には、現在橋が架かっている付近にはたいがい船渡場がありました。この内、矢代（篠ノ井橋）・赤坂・寺尾（旧川中島橋）・関崎・布野（村山橋）の５つの渡し場は、藩の道橋奉行の管轄のもと、船渡しを利用する村々から籾・麦・大豆等を徴収する「繋籾」によって維持されていました。船渡賃は繋籾負担地域の住民は無賃で、その他の旅人などは藩の定賃銭で渡っていました。

上記５ヵ所以外の渡し場は、住民が対岸にある耕作地等への移動手段として「作場渡し」・「野渡し」と呼ぶ民営の船渡しで川を渡っていました。

通行人のたまり場となるこれら渡し場や、付近の路上ではもめごとが起こることもありました。嘉永元年（1848）３月20日、松代城下へ糞尿を汲みとりに行った東福寺村の百姓、弥吉と五郎右衛門は、なじみの家々を回り赤坂の渡しを渡って帰途につきました。その道中、土手外という場所で松代城下へ向かう通行人とすれ違います。２人はその人物が藩の同心とは知らずに、片側に寄らずに通り過ぎようとして呼びとめられました。酒を飲んでいた２人は、同心の問いかけに手拭い・ほっかぶりも取らず、在所も他領のものと偽りをいって訴えられました。当時交通道徳として、肥桶を担いだ者は道の片側によける、というルールがあったのでしょう。弥吉、五郎右衛門は取り調べを受け、無礼をはたらいたかどにより「手鎖・腰縄」で村預けに処せられます。二人は反省し、前年の善光寺地震の復旧で人手が必要な時でもあり寛大な処置をお願いしたいと、東福寺の専精寺住職を通して藩庁に懇願しました。その甲斐あって二人は放免となりました。（東福寺村文書 篠ノ井公民館東福寺分館蔵）

千曲川左岸の東福寺村・中沢村・小森村などの農民は、糞尿を下肥として利用するために、城下の御得意先を回り、赤坂の渡し・中沢の野渡しを往来したと思われます。こうして、城下から運ばれた糞尿は、近郊の畑の肥やしとなり、蔬菜類・甘草・綿・菜種の成育を助け、その恵みの一部が城下の食卓にのぼり還元されていたのです。いろいろなものが船渡しを利用して川の両岸を行き来していたのです。

（文責　降幡浩樹）



▲嘉永５年　松代藩御役所置附千曲川絵図面　３枚の内１枚（部分）　長野市立博物館蔵